Ｅ（イー）通信

エルフォルク

２０２６年３月号

今年の３月３１日、ドコモが提供してきたFOMAとｉモードが終了し、ＫＤＤＩやソフトバンクに続いて日本から３Ｇサービスが完全に消滅します。かつて一世を風靡した「ガラケー」は、４月１日午前０時をもって、通話もメールもできない「ただの箱」になってしまうのです。平成の記憶が、またひとつ消えていきますね。

「育成の殻」を打ち破れ

今年は長期寒波で思った以上の積雪や道路の凍結などありましたが、少しずつ日脚が伸び、冷たい空気の中でもようやく梅の蕾がほころび始めました。

春の兆しが見えてきましたが、まだ一時的な寒さや朝の強い冷え込みはあるとの予報です。日々の体調管理には気を配りましょう。

さて、我らがカープ。

復活の日はまだまだ遠いようだ。　2026年シーズンを前にして、またしても「若手育成」を旗印に掲げている。　この言葉を何度聞かされてきただろう。　育成は本来、勝利への道筋であるはずだが、近年のカープは、育成を“免罪符”として使い続けているように見える。

確かに先発陣はリーグでも屈指だ。　森下、床田、常廣、玉村。　名前を並べれば豪華だが、これは裏を返せば「先発が良くなければ勝てないチーム」であることの証明でもある。　昨季のリリース崩壊は記憶に新しいが、その反省を踏まえた補強は乏しく、結局は「若手の奮起」に期待するだけ。栗林の先発転向は、ブルペンの再建を諦めたかのような印象すら与える。

野手陣はさらに深刻だ。　鈴木誠也の移籍から数年、いまだに「４番不在」という問題を解決できていない。　小園がチームの中心として成長したのは明るい材料だが、彼一人に攻撃の軸を背負わせる構図は危うい。　末包、中村奨成、新加入の平川らがどこまで伸びるかは未知数で、長打力不足は依然としてチーム最大の弱点だ。

フロントの姿勢にも疑問が残る。　「育成路線」は美しい響きだが、勝てない理由を覆い隠すための言葉になってはいないか。　補強を避け、若手に期待を押し付けるだけでは、再建など永遠に訪れない。　かつての黄金期を支えた選手たちが次々と去り、チームは明らかに過渡期にある。　それでもなお、明確なビジョンを示せていない。

2026年のカープに必要なのは、若手の覚醒でも、奇跡的な連勝でもない。　必要なのは、勝つために何を捨て、何を選ぶのかという“覚悟”だ。

育成と補強のバランスをどう取るのか。　リリーフ再建に本気で取り組むのか。　４番問題をいつまで先送りにするのか。

このまま「育成の年」を繰り返すのか。　それとも、再び強いカープを取り戻すのか。

問われているのは、選手ではなく、チーム全体の姿勢である。

2026年はその覚悟が試される一年になる。

（記：上岡）

頑張れカープ！！

エルフォルクはあなたを　そしてカープを　全力応援致します！

裏面もご覧ください。